
福 井 県 医 師 会

だまり

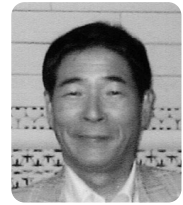
第556号 平成19年(2007)10月



陶仕女彩繪俑 福井市 吉村 信

病院機能評価受審

—そのもたらしたもの—



勤務医担当理事 大橋博和

病院機能評価受審の話など何を今更と思われる先生方も多いかもしれませんが、私たちの病院におけるその顛末記を記してみたいと思います。

機能評価受審を決定したのは、平成18年3月のことでした。準備作業として評価項目から「委員会」、「規程」、「マニュアル」などのキーワードを抜き出して分析すると、委員会だけでも合計55、また職員全員が周知していることが要求されている「規程」、「マニュアル」は実に53種類にもものぼり、さらにそれとは別に個々の部署、部門でも気が遠くなるほどの量の「マニュアル」が必要なことが判り、前途の遙かなことを思い知らされました。

18年6月、病院全職員に対する説明会を行いました。しかし当初は全く関心が盛りあがらず、遅々として作業が進まない状況が続きました。12月には機構から模擬審査を受けましたが、その講評では意外に厳しい言葉はなく、職員はすっかり安心してさらに休眠状態に入ってしまった。

ようやく焦りが見えだしたのは19年5月になってからのことで、各部署でせせと現状の分析や改善作業、マニュアルや委員会議事録の整備作業が進み始めました。最大の難関は看護手順の整備で、これには数多くの看護部の人たちが連日夜遅くまで、あるいは休日に出勤してまで作業を進める姿を多く見かけました。

いよいよ7月に入ると作業もヒートアップし、職員の声のトーンが一段高くなり、コピー器があまりの酷使にダウンするほどになりました。そして訪問審査直前の週末には、続々と職員が出勤してきて最後の追い込みで拍車がかかりました。職員の団結の力を目の当たりにして一種の感動すら覚えたほどです。

訪問審査の前夜、委員会や会議、組織の「規程」、各種の「マニュアル」、「議事録」等々の超大量の文書資料が審査会場に集められました。その資料の厚さは合計すると実に13m50cm！ 少なく見積もっても約10万枚の文書が作成され、準備されたこととなります。それは圧倒的な存在感であり、はるばると続く山並みのようでした。この1年5ヶ月間を費やしてきた職員の膨大なエネルギーのかたまりを見たような想いがしました。

この集結した職員の力は、7月25日から3日間の訪問審査受審という形で一旦結ばれました。そして今、それが私たちにもたらしたものは何だったのだろうかということに思いを寄せています。

一つには、これを契機に当病院の医療の質を要求されている水準と比較して多面的に検討し、改善したという実に大きな進歩を挙げることができるでしょうか。それは病院が規程、マニュアルなど組織としての体系化された文書資産を築くことができたという大きな意味をも併せ持っています。

二つにはこの活動を通じてもたらされた職員の強い一体感です。それは終盤には一種の熱気を帯びたお祭りのような感がありました。誰か個人にスポットライトが当たるのではなく、病院すべての部門が審査対象であり、職種を越えてチームで課題解決に当たったことに意味が大きかったように思います。ともあれ病院機能評価を契機に職員は明るく元気になり、活気が感じられるのは事実なのです。そして今私たちは3ヶ月後の審査結果の通知を待っています。読者の先生方がこの「醫縫録」を眼にされる頃、その結果は私たちの手元に届く予定です。

表紙写真説明：陶仕女彩繪俑

青銅器と陶磁器の世界的コレクションで知られる上海博物館が誇る、唐三彩の名品である。今まで数多くの唐三彩を鑑賞してきたが、これほど品が良く自信に溢れた女性像は見たことがない。女性の権力が頂点に達した則天武后時代の作品であろうか。彩色はかなり剥落しているが、頬のみに残る鮮やかな臙脂色が却ってこの女性のふくよかな面立ち、たおやかさを強調している。頬の紅は、杜甫の祖父、杜審言の「贈蘇綰書記」にある燕支山の紅花から作られた頬紅を表しているのであろうか。とまれ、中国文化を愛する者にとっては、様々な想像を可能としてくれる極め付きの一品である。

福井市 吉村 信

贈蘇綰書記

杜審言

蘇綰書記に贈る

知君書記本翩翩

知る 君が書記 本翩翩

為許從戎赴朔邊

為に許す 戎に従って朔邊に赴くを

紅粉樓中應計日

紅粉樓中 一応に日を計うべし

燕支山下莫經年

燕支山下 年を経る莫れ